

2019 年度宮城学院中学校高等学校入学式式辞

ご入学おめでとうございます。中学校 63 名、高等学校にはエストニアから 2 名、台湾から 2 名、パキスタンとタイから 1 名ずつ合計 6 名の留学生を始めとする 140 名の新入生の皆さんを迎えることができました。わたしたちも教職員、在校生一同は、大きな期待と喜びと高鳴る思いをもって、心から皆さんを歓迎いたします。また、この良き日まで手塩にかけてお嬢様を育てこられた保護者の皆さま、ご家族の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

宮城学院中学校・高等学校は、今から 133 年前の 1886（明治 19）年に「宮城女学校」として、仙台に創立されたミッション・スクールをルーツとしています。合衆国改革派教会から派遣された弱冠 31 歳のエリザベス・R・プールボー宣教師が初代校長として就任し、宮城学院の歩みは始まりました。当時の日本は、まだまだ男性中心の考え方が根強く、女性が教育を受けることも、人格として尊ばれることも軽んじられていました。そのような中であって、プールボー先生は、日本の少女たちが、「神を畏れ、隣人を愛する」者として、豊かな教養を身に付け、自分の自分らしさを存分に生かした歩みができるようになることを願い、13000 キロ、40 日間の旅路をたどり日本に、仙台にやってきました。そのプールボー先生の志はいささかも褪せることなく、今日の宮城学院中学校高等学校に継承されていると言えるでしょう。

ところで今日は、皆さんと共に「愛」ということについて思いめぐらしてみたいと思います。古代ギリシアでは愛を表す言葉として 4 種類の言葉が用いられていました。友人同士の愛を表すフィリア、親子の愛を表すストルゲー、恋愛を表すエロース、そして神様の無条件の絶対的な愛を示すアガペーです。今日は、特にエロースとアガペーについて考えてみたいと思うのです。

エロースとしての愛の特徴を一言で言い表せば「価値発見的な愛」ということです。相手の中にある何か価値のあるものを見出し、その価値あるもののゆえに相手愛する愛。そこでは相手愛すると言っても、相手の存在全体が問題にされるのではなく、相手が持つ何か問題となります。それが人柄の良さであれ、頭の良さであれ、容顔の美しさであれ、富であれ、地位であれ、何でもよいのです。とにかくその人の中に見い出される自分にとって「価値ある何か」に惹きつけられて愛する愛と言えるのです。

英語で表現すれば以下のようなになるでしょう。

I love you, because you are beautiful, wise, rich, cool………….

エロースの愛は確かに恋愛において典型的に現れます。しかしエロースの対象になるものは、恋愛ばかりではありません。真・善・美という精神的価値もエロースの対象となりえるからです。例えば、JAXA の研究者たちが、「はやぶさ 2」で小惑星「竜宮」から岩石を持ち帰り太陽系誕生の謎に迫りたいという壮大な夢に情熱を注ぐのも、ピアニストがショパン国際コンクールでの入賞を目指してひたむきにレッスンに打ち込むのも、高校球児たちが、甲子園を目指して毎日白球を追い続けるのも、昇華されたかたちでのエロースの現れと言えるのです。ですからエロースとは、自分自身が価値あるものを見出し、それを得ようとし、自分自身を向上させる大切な原動力と言えるでしょう。

人は一人一人違います。性格も容姿も感じ方も考え方も皆違うのです。一人として同じ人はいません。勉強ということであれば、数学が得意の人もいれば、スポーツが得意な人もいます。国語が得意な人もいれば、美術が得意の人もいます。英語が得意な人もいれば音楽が得意な人もいます。皆が皆、同じ才能を持っているわけではありません。私は、この宮城学院中高で、皆さん一人一人が、自分に相応しい価値あるものを見出し、それを得るために情熱を注ぎ、なりたいじぶんになり、自分の夢を実現してほしいと思うのです。

今年度から宮城学院中高では、これまでの二コース制を三コース制に改めました。なぜでしょう。答えは一つです、皆さんのなりたい自分の夢を、よりよくサポートするために、よりきめ細かく皆さん一人一人の個性に即した成長の道を備えるためなのです。

さて、エロースが価値発見的な愛であり自らを向上させる愛だとすれば、アガペーとはどんな愛をさすのでしょうか。それは価値創造的な愛です。アガペーの愛においては相手が、愛するに値する価値あるものを何も

持たなくとも愛する愛をさします。つまり、相手が一個の人間として存在することにおいて無条件で愛する愛です。このような愛は、皆さんのお父さん、お母さんが皆さんに注ぐ親の愛に似ていると言えるでしょう。実はこの愛こそは、聖書の神がイエス・キリストにおいて私たちに示してくださった愛なのです。英語で表現すれば、

I love you, because you are you. ということです。

実は、わたしたちは強いようで弱い存在です。様々なことで傷つき、自分のなかに価値を見いだせず、自分ってなんてダメなんだろう、ちいっぽけな存在だなあ、としゃがみ込み、立ち上がれなくなることもあるのです。そんな時に君は駄目じゃない、勝手に自分を見くびってはいけないよ、君の存在それ自身が、わたしの目に値高く貴いから、と自分の存在を全面的に受け入れてくれる神のアガペーの愛の事実を知らされた人は、再び立ち上がることができるのです。

抽象的に話していてもちょっと分かりにくいと思うので、犬飼道子さんの名著『人間の大地』からアガペーの愛の譬えとなる、タイのある難民キャンプでの出来事を紹介したいと思います。

「ほぼ7万人（1979年12月19日の人数）収容のカオイダンのキャンプ第一セクション内の病者テント内に、ひとりの子がいた。ひとりぼっち。親は死んだか殺されたか、はぐれたか、兄弟姉妹はいたのか死んだのか。一語を口にせず空を見つめたままの子。衰弱し切ったからだは熱帯性悪病の菌にとっての絶好の獲物であったから、その子は病気をいくつも持っていた。国際赤十字の医師団は打てるだけの手を打ったのち、匙を投げた。

『衰弱して死んでゆくだけしか残っていない。可哀想に……』

子は薬も、流動食も、てんで受けつけなかったのである。幼ごころに『これ以上生きて何になる』の絶望を深く感じていたのだろう。

ピーターと呼ばれる、アメリカ人のヴォランティア青年が、その子のテントで働いていた。医者が匙を投げたそのときから、このピーターが子を抱いて坐った。特別の許可を得て（ヴォランティアは夕方五時半にキャンプを出る規則）夜も抱きつづけた。子の頬を撫で、接吻し、耳もとで子守歌を歌い、二日二晩、ピーターは用に立つまも惜しみ、全身を蚊に刺されても動かず、子を抱きつづけた。三日目に反応が出た。ピーターの眼をじっと見て、その子が笑った！『自分を愛してくれる人がいた。自分をだいに思ってくれる人がいた。自分は何れにとってもどうでもいい存在ではなかった……』この意識と認識が、無表情の石のごとく閉ざされていた子の顔と心を開かせた。ピーターは泣いた。よろこびと感謝のあまりに。泣きつつ勇気づけられて、食と薬を子の口に持って行った。子は食べた。絶望が希望にとって代わられたとき、子は食べた。薬も飲んだ。そして子は生きたのである。回復が確実なものとなったある朝、わたしはセクション主任と一緒にその子を見に行った。

『愛は食に優る。愛は薬に優る』

主任は子を撫でつつ深い声で言った。

『愛こそは最上の薬なのだ、食なのだ……この人々の求めるものはそれなのだ……』

朝まだき、とうに四〇度に暑気が達し、山のかなたからは銃声が聞え、土埃のもうもうと吹きまわっていたカオイダンでのあのときを、わたしは生涯忘れることはないであろう。」

宮城学院中学校高等学校はどんな学校ですか、と問われたら明瞭に答えることができます。「I love you, because you are you. という神のアガペーの愛に支えられ、『神を畏れ、隣人を愛』しつつ、独り独りが自分の自分らしさに目覚め、なりたい自分を実現するために切磋琢磨する学校です」と。

皆さんが主の恵みと愛に支えられ、良き師、良き友と中高での6年間、高校での3年間を本当に自分にふさわしい道を見いだすべく健やかに力強く歩んで行かれることを祈り願い、私のお祝いの言葉に代えさせていただきます。

ご入学おめでとう。

2019年4月8日

宮城学院学院長

嶋田 順 好